

「倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会」報告

二〇一四年一月二五日、共同利用共同研究拠点研究「日本史料の研究資源化」の特定共同研究（海外史料領域）「本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる『倭寇』像の比較研究」の最終年度にあたり、総括的な研究集会を開催した。当日はまず須田が三年間の成果をとりまとめ、ついで共同研究員の板倉聖哲氏に美術史の視点から「倭寇図巻」・「抗倭図巻」の位置について語っていただき、最後に宮崎大学の関周一氏に共同研究の外側の視点から総括コメントをいただいた。三報告と板倉報告に関する討論の概要を以下に掲げ、本研究に関わってくださいましたすべての方々に感謝を申し上げる。

（研究代表／須田 牧子）

特定共同研究倭寇プロジェクト、三年間の成果

須田 牧子

二〇一一年より、共同利用・共同研究拠点特定共同研究（海外史料領域）として、「本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる『倭寇』像の比較研究」と題し、三年間の予定で研究を進めてきた。最終年度にあたり、これまでの研究の推移を振り返り、明らかにしたことをまとめ、課題を提示して、一応の総括を試みることにしたい。

1、研究のあゆみ

本プロジェクトの始点は、史料編纂所所蔵『倭寇図巻』の赤外線撮影により、従来知られていなかった文字、それも図巻の性格を決定づけるような文字が発見されたことにある。撮影は二〇一〇年五月におこなわれ、「弘治四年」「大明神捷海防天兵」「肅清海□□倭夷」という、『倭寇図巻』が一六世紀、倭寇と明軍との合戦を描いた作品であることを決定づける文字が確認された。これらの文字が肉眼では捉えられなくなってしまう理由としては初め、経年劣化によるものと理解していた。し

かし二〇一三年秋におこなわれた谷昭佳氏・高山さやか氏による再調査の結果、塗り潰されたことによるものであることが判明した。それも「弘治四年」の文字は、上からさらっと白く簡単に塗られているにすぎないのに対し、「大明…」の旗は、周囲の旗と同系色で丁寧に塗り潰されていた（図1）。「肅清海□□倭夷」の部分も同様である。上から塗られた塗料が経年劣化によってまだらに剥落したのが現状であって、明らかに、ある段階で図巻の性格を隠そうとする意図のもとに作為がなされたことがうかがえる。

一方、『倭寇図巻』とそっくりな図巻『抗倭図巻』が中国国家博物館に所蔵されているという情報は、すでに二〇〇七年、史料編纂所附属画像史料解析センター一〇周年記念シンポジウムで浙江工商大学の王勇氏によって紹介されていたが、ちょうど二〇一〇年春当時、中国国家博物館は、二〇一一年三月のリニューアルオープンに向けて、国際共同研究のテーマを模索していた。二つの情報をキャッチした中国科学院の黄榮

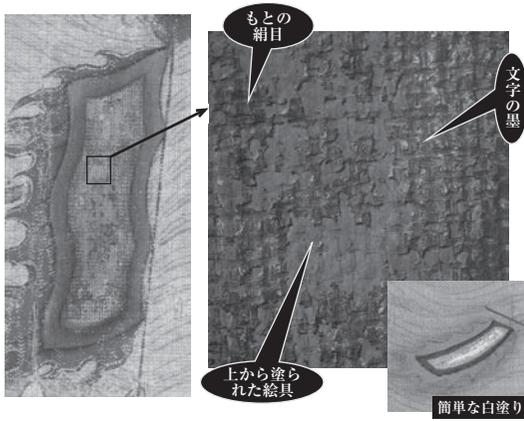


図 1

光氏のご尽力により、二〇一〇年九月、史料編纂所のスタッフが、中国国家博物館を訪れ、『倭寇図巻』と『抗倭図巻』の共同研究の覚書を交わすとともに、中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』の通常撮影ならびに赤外線撮影を行った。これにより、両図巻がたいへんよく似ていることが確認され、また『抗倭図巻』には肉眼で見える以上に多くの文字があることが発見された。とりわけ抗倭図巻の冒頭から「日本弘治三年」の文字が見出されたことは、両図巻の親近性と差異性を実感させ、研究を深めていく手がかりとなった。これらの成果をもとに、一月には史料編纂所において「比較研究『抗倭図巻』と『倭寇図巻』」と題した国際研究集会が開催され、これら新たな知見について、三つの報告がなされた。¹⁾同時に開催された史料編纂所主催第三五回史料展覧会においては、『倭寇図巻』原本と、中国国家博物館から贈られた『抗倭図巻』のレプリカ

が展示され、多くの方の目に触れることとなった。二〇一〇年の春から秋にかけておこなわれたこれら一連の研究成果をうけ、『抗倭図巻』『倭寇図巻』という二つの図巻の解説を進め、親近性の高い二つの図巻の存在をどう理解するかを歴史的な文脈の中で検討するべく、東アジア海域史研究・明代史研究・美術史研究などの研究者の協力を得て発足したが、本プ

ロジェクトである。二〇一一年四月より今日までの三年間の間に、国際研究集会を三回、中国での史料調査・現地踏査を三回おこない、また必要に応じて国内での研究会・史料調査、またオープンキャンパスなどの成果展示などをおこなってきた。二〇一四年度には図録の刊行も予定している。³⁾

2、研究史

以上のとおり、二〇一〇年より明らかに活況を呈した倭寇図巻研究だが、それ以前、『倭寇図巻』がどのように理解され語られてきたのかを簡単にまとめておこう。

『倭寇図巻』研究史

『倭寇図巻』が史料編纂所に入架された時期ははっきりしないが、一九二三年に第十一回史料展覧会に帝国大学蔵として出品されているから、それ以前の入架であることは間違いない。本郷の文求堂という古書店が、中国から輸入してきたものを購入したと伝えられる。⁴⁾

この『倭寇図巻』につき、最初に解題を書いたのは辻善之助である。一九三〇年古兵書刊行会から『倭寇図巻』と題してモノクロで複製版が作られた時、ごく短い文章を寄せたのがそれである。なお、一九二三年の史料展覧会においては、『倭寇図巻』は『倭寇図』と紹介されていたし、そもそも『倭寇図巻』本体の巻頭に付せられた題には「仇十洲台湾奏凱図」とある。したがって『倭寇図巻』が「倭寇図巻」と名付けられたのはおそらくこの複製版作成時がはじめではないかと考えられる。辻はこの解説で巻頭題の示すところの作品の性格を否定し、台湾奏凱を描いたものではなく、また仇英の真筆でもなく、明末に作られた、倭寇を描いた作品であると、「倭寇史料として稀観の逸品」と評した。⁵⁾



図4 『増補万宝全書』
(1806年刊)
(東京大学総合図書館蔵)



図3 『学府全編』
(1607年刊)
(内閣文庫蔵)



図2 『三才図会』
(1609年刊)
(内閣文庫蔵)

※図2～4、田中健夫注7書より転載。

ついで対外関係史研究の立場から、『倭寇図巻』を分析の俎上に上せたのは田中健夫であった。一九七四年、近藤出版社からフルカラー写真で原寸大の複製が作られた時に、一文を寄せている。田中は、図巻画面を詳細に解説したうえで、『倭寇図巻』は「明末の倭寇および日本に対する明人の関心の高まりの中で作り出されたもの」で、「内容が『日本

図纂』『籌海図編』の記述とよく符合する点から考えても、そのことは明らか」であり、倭寇の風俗を描写した絵画史料で現存する、ほとんど唯一と称してよい極めて貴重な存在、と位置付けた。⁶⁾

田中の『倭寇図巻』研究はその後、中国人による日本人像というテーマに展開していった。すなわち、中国の類書（絵入り日用百科全書）の「倭寇図」を集めて分析し、明代以降中国人が描いてきた日本人像には、
①僧侶を写したとみられる円頂・長袖の図（図2）、
②頭髪を剃り大刀を

肩にかつぎ、半裸ではだしの倭寇像（図3）、
③『倭寇図巻』の倭寇像、

があることを指摘、①②は江戸時代初期にはすでに日本に紹介されていたが、①の系統は受け継がれず、②が中国人からも日本人からも注目された、③は②の一種とも考えられる、としたのである。さらに、②が清代中期以降、半裸で裸足の兇暴な倭寇像から、着衣で裸足の温和な倭寇像（図4）へと変遷していくことを明らかにし、しかしそれは、明代に比べてはるかに深く交流するようになった結果ではなく、清代中国人の日本への無関心とそれゆえの無頓着さが生まれた現象であるとして、相互理解の難しさを示した。この研究で、田中が事例採取の対象としたのは『三才図会』『学府全編』『万宝全書』などであったが、田中は「明末刊行の類書類をさらに広く検索するならば、類似の倭寇図は多く見出すことはできよう」と予想していた。⁸⁾

田中が『倭寇図巻』の課題を書いたとき、美術史の立場から、同じく課題を寄せたのが川上溼だった。川上は、『倭寇図巻』は（仇英の作品ではなく）職業画家の作品で、筆線の単調なことからオリジナルな画蹟とはみなされない、作期は、文徵明とその子弟門人によって樹立された呉派文人画風が民間画工にまで浸透していく明末清初と推定される、とした。

『抗倭図巻』研究史

一方、『抗倭図巻』は、一九六五年、中国国家博物館の前身の一つ、当時の革命博物館が文物商店から購入したもので、購入当時、展覧会も開催されたようだが、その詳細は不明であるという。『抗倭図巻』についての解説は、二〇〇六年に発行された同館所蔵作品の図録解説が確認できる限りもっとも古い。この図録は、『抗倭図巻』の全画面をカラーで



図5 『三綱行実』

(山口県立大学付属図書館寺内文庫所蔵)

載せており、『抗倭図巻』が、明軍が倭寇を追い払った図巻であることが一見してわかるようになっていいる。解説においては、『倭寇図巻』との関連には論及せず、肉眼で読み取ることのできた文字のうち「日本弘治一年」に注目し、嘉靖三十四年（弘治元年、一五五五）に行われた王江涇の戦いを記念して描かれたものと推定している。王江涇の戦いとは、張経が倭寇を打ち破った戦いであり、その後の浙直総督胡宗憲による倭寇鎮圧ではなく、この王江涇の戦いこそが、真に倭寇に打撃を与えた戦いであったと、後代の知識人に信じられたものである。その勝利にもかかわらず張経は讒言により失脚、斬首された。二〇一〇年秋の研究集会における朱敏氏の報告は、基本的にこの解説の理解を引き継ぎ、『抗倭図巻』は張経の部下あるいは家族が、張経の死後、彼を偲ぶために描かせたものではないかとしている⁽¹⁰⁾。

また二〇〇七年の画像史料解析センターのシンポジウムで『抗倭図巻』について紹介された王勇氏は、『抗倭図巻』は倭寇と明軍の戦いを描いたもの、『抗倭図巻』は倭寇と朝鮮軍を描いたものとされた。『抗倭図巻』

は「浙直文武官僚」など肉眼で見える文字によって、明軍が出動していることが明らかなのに対し、『倭寇図巻』はそうではなく、むしろ官軍が八卦の旗をたてているの

で朝鮮軍と倭寇との戦いを描いたものではないかとされたのである。八卦の旗を立てているとなぜ朝鮮軍になるのかは不明ながら、しかしその時点では、『倭寇図巻』が朝鮮軍と倭寇の戦いを描いていない証拠はどこにもなかった。『倭寇図巻』が明軍と倭寇の戦いであることを証明したのは、二〇一〇年に赤外線撮影で発見された図巻に書かれた文字であったから、前期倭寇を描いた着色の絵がないことも相まって、たとえば二〇〇九年のE.T.V特集番組「日本と朝鮮半島の二〇〇〇年」でも、二〇一一年のE.T.V番組「海がつかないだニッポン」でも、『倭寇図巻』は、前期倭寇と朝鮮軍との戦いの図として登場している。なお、前期倭寇を描いたものとしては、『三綱行実』という朝鮮王朝時代に作られた啓蒙書（版本）に所収される挿絵があるが（図5）、こちらはなぜか現在にいたるまで倭寇図としてはほとんど注目されていない。

3、三年間の研究成果

蘇州片という理解

二〇一〇年に中国国家博物館との共同研究が開始された当初、『抗倭図巻』と『倭寇図巻』の関係は双子、あるいは親子など、ごく近似したものとして捉えられていた。川上の指摘以来、『倭寇図巻』はオリジナルな作品ではなく模本であるという認識があったから、『抗倭図巻』・『倭寇図巻』は同一工房において同じ原本を見て作られたものではないか、あるいは抗倭図巻こそが倭寇図巻の原本ではないかとすら想定されていた。

しかし本プロジェクト開始後、二〇一一年五月の最初の研究会で、『倭寇図巻』原本と『抗倭図巻』レプリカの熟覧を行った際に、共同研究員の板倉聖哲氏から、①『倭寇図巻』も『抗倭図巻』もともに「蘇州片」として考えるべきものであること、②画を構成している要素を比較する

と、両図巻の距離は決して小さくはないことが指摘された。さらに、同年末に開催された国際研究集会で馬雅貞氏により、第三の倭寇図巻ともいうべき『平倭図巻』の存在を示す史料が紹介されるに及んで、『倭寇図巻』『抗倭図巻』は、江南の工房で作られた蘇州片であること、つまり『原倭寇図巻』ともいうべきおおもとの図巻から、数多くの模倣作が派生したなかのひとつであることが、確信されるようになった。しかしながら、諸事情により、二〇一〇年以來『抗倭図巻』原本の閲覧の機会が得られず、このような『抗倭図巻』『倭寇図巻』の美術史的な位置づけを、研究集会という場で論じる条件が整わなかった。二〇一二年七月、最終年度にしてやっと本プロジェクトとして『抗倭図巻』の熟覧が叶ったので、この時の成果をもとに、板倉氏に日本史研究者にとっては馴染みのない「蘇州片」という概念とともに、倭寇図巻・抗倭図巻の美術史的位置づけを改めて報告していただくというのが、本研究集会の主たる趣旨である。

戦勲図の作成流行と3つの倭寇図巻

さて、二〇一一年末の馬雅貞氏の報告は、多方面にわたり種々の影響と進展をもたらしたが、その一つに、『原倭寇図巻』はいったい何を描写していたのかという論点がある。馬氏は、「戦勲と官蹟」と題し、明代中期以降の官蹟図の流行を指摘し、さらにそこから派生して、官蹟のうちでも戦勲、それも文官の戦勲図の作成が流行したことを論じ、その現存作例として中国国家博物館『平番得勝図巻』などを分析した。さらに「文徵明画平倭図記」なる史料を紹介し、そこでとりあげられている『平倭図巻』なる図巻に描かれる人物が、『抗倭図巻』にそっくりなことを指摘し、『平倭図巻』『抗倭図巻』『倭寇図巻』がともに、胡宗憲の倭寇討伐の顕彰図Ⅱ戦勲図から派生した蘇州片であると位置づけた。⁽¹²⁾

「文徵明画平倭図記」については、共同研究員の山崎岳氏により詳細な史料紹介と訳注がすでになされているが、かいつまんで言えば、張鑑なる清代中期の文人が、阮元なる揚州居住の富裕な権力者に所蔵されていた、『平倭図巻』（現在は所在不明）について、阮元の依頼により検討を加えたものである。『平倭図巻』には、張鑑なる人物によって書かれた題跋が付せられていたといい、その題跋と図巻の内容を検討した張鑑は、この図巻を嘉靖三五年（弘治二年、一五五六）に行われた胡宗憲による徐海討伐を称えたものと解した。張鑑は胡宗憲の功績に対しては懐疑的であり、倭寇に打撃を与えたのは張経による王江涇の戦いであつたのにと胡宗憲を批判する言辞で図記を締めくくっているが、いずれにしても張鑑はこの『平倭図巻』を胡宗憲の戦勲図と解したのである。

『原倭寇図巻』はなにを描いていたか

先述したように本史料の紹介は、『倭寇図巻』『抗倭図巻』の原本たる『原倭寇図巻』がそもそも何を描いていたのか、ということについて再考させる契機となった。二〇一〇年の赤外線撮影の成果によって、『倭寇図巻』『抗倭図巻』がともに、明軍と倭寇とが合戦し、明軍が勝利したというストーリーで描かれていたことは確認されていた。また二〇一一年の特定共同研究の発足以後は、『倭寇図巻』『抗倭図巻』は『原倭寇図巻』から大量派生した模倣作のひとつである可能性が承認されてきた。それでは『原倭寇図巻』はなにを描いていたのかという点については、馬氏の報告以前には、おおむね以下の三つの解釈が存在した。

①「日本弘治一年」の年号があることを踏まえれば、張経による王江涇の勝利の顕彰図と考えられるとするもの。

本説には、「一年」という表現はおかしい、「元年」であるべき、またこれでは同じ『抗倭図巻』冒頭の「日本弘治三年」、および『倭寇図巻』

の「弘治四年」が説明できないという批判がある。

②『抗倭図巻』『倭寇図巻』の両方から検出された弘治三年・四年の存在を重視すれば、嘉靖大倭寇の終焉として記憶された王直捕縛の物語として、その指揮を執った胡宗憲を称えるために作られたと考えられるとするもの。

嘉靖三十五年（弘治三年、一五五七）一月の王直捕縛は合戦の結果ではなかったが、王直捕縛直後から行われた、王直に同行してきた大友氏派遣船と明軍との合戦は、大友船が明軍に焼かれるなどの経緯を経て、翌嘉靖三十六年（弘治四年）七月、大友船が明軍の包囲をかくぐって逃亡することにより終結する。この大友氏派遣船の概要とその歴史的意義については、共同研究員の鹿毛敏夫氏によって詳論されている。¹⁴

③②の解釈を踏まえつつも、特定の個人・特定の合戦に収斂させず、王直捕縛とその斬首が、嘉靖大倭寇の終焉として語られてきたことを重視し、嘉靖大倭寇に対する明軍の勝利の物語として象徴的に描かれ、それにふさわしい年号として弘治年号が書かれたのではないかと考えるもの。

しかしながら馬氏が紹介された『平倭図巻』についての張鑑の解釈は、同じ胡宗憲の事績ではあるが、徐海討伐に重きを置くもので、王直捕縛の事績を重視する②③の見解とは、ずれることになる。だが『平倭図巻』に題跋を付していたという張寰は、実は胡宗憲と同時代人であり、胡宗憲と交遊関係にある文人であった。¹⁵つまり胡宗憲の戦勲図が作られた際、題跋を付すこともありうる人物なのである。とすれば、『原倭寇図巻』は胡宗憲の徐海討伐の勝利を称えるために作られた戦勲図であり、胡宗憲の知人張寰の題跋が付せられたものであった、そして『平倭図巻』はこの張寰の題跋をも写しとった『原倭寇図巻』に比較的忠実な模本である、という解釈が成立しうることになる。

『原倭寇図巻』は徐海討伐を描いていたのか

もちろん、あらゆる分野において贋作の盛んだった明清代の世相を考えば、張寰の題跋は後代の付会でもともとそのようなものを張寰が執筆した事実はおそらくなかった可能性はおさえておく必要がある。また『平倭図巻』とそっくりな人物造形が見られる『抗倭図巻』には、燃え盛る沈荘や討ち取られた徐海の首など、徐海討伐のクライマックスとなりうるような場面が描かれていない。ここから『平倭図巻』さらには『原倭寇図巻』は、徐海討伐（＝「乍浦・沈荘の役」）そのものを描いていたと本当に言えるのかという疑問も呈されることとなる。¹⁶

ただし、『抗倭図巻』は『平倭図巻』の忠実な模本というわけではない。一例を挙げれば、張鑑が『平倭図巻』に見出した「都指揮戴冲霄」の姿は『抗倭図巻』には見えない。したがって『抗倭図巻』に描かれていない人物やモノが、『平倭図巻』に描かれていなかったとは限らない。また張鑑の記述からは、『平倭図巻』に民衆の避難・海上合戦・凱旋・明軍の出迎えという場面があったこと、そこに登場する人物が『抗倭図巻』と酷似していたことは確認できる。しかし全体構成については論及されておらず『平倭図巻』の全貌はうかがうことができない。したがって『抗倭図巻』に存在しない画面は、『平倭図巻』にも描かれていなかったともまた言い切れることはできない。もっとも描かれていたら張鑑が言及しなかったはずがないと考えれば、徐海が最終的に殲滅された沈荘の場面は『平倭図巻』にもなかった可能性も大きく、メインの戦闘が描かれていない戦勲図はありうるのかという疑問は当然ではある。

現時点で張寰の題跋の真贋を確認する手段はないが、もし本物だとすれば、『原倭寇図巻』は、胡宗憲の徐海討伐を称えるために作られた戦勲図と解するのが、やはり妥当であろう。だが、『倭寇図巻』『抗倭図巻』は冒頭に弘治四年・弘治三年の年号を有しており、この点からすれば、

両図巻の画題を弘治二年の徐海討伐であると理解することはできない。徐海討伐から王直捕縛の物語へという画題の展開変化の可能性を考える必要がある。

一方、もし張寰の題跋が後代の付会だとすれば、『平倭図巻』が《原倭寇図巻》の形態をほかの二作品より、より強く継承していると言いきれない。ただし、ここで注意すべきは、『平倭図巻』は、王直捕縛の物語を描いていると解しうる特徴は備えていなかったということである。すなわち『平倭図巻』に弘治三年・四年の年号が書かれていれば、弘治二年の徐海討伐を描いたものであるとは解しえなかったであろう。

『平倭図巻』は、題跋の助けは必要としたかもしれないが、ともかくも徐海討伐を描いた絵と判断されるような特徴をもって存在していたと考えられる。となれば、『原倭寇図巻』から派生した絵には、王直捕縛を髻髷とさせる絵、徐海討伐を髻髷とさせる絵の二系統があり、さらに『平倭図巻』に描かれていたとされる人物が、『抗倭図巻』から落ちてきていることを考えれば、どちらかと言えば、徐海討伐を髻髷とさせる『平倭図巻』のほうが、王直捕縛を髻髷とさせる『抗倭図巻』に先行していたと考えられる。

加えて『倭寇図巻』『抗倭図巻』に描かれる図巻の風景は、王直捕縛の舞台である舟山本島よりは、徐海討伐の舞台である乍浦・沈荘といった江南デルタの風景にはつきりと似通っている。これは二〇一二年秋の現地踏査の結果を踏まえた見解であるが、このことを併せ考えれば、『原倭寇図巻』は、胡宗憲の徐海討伐を中心とした倭寇制圧の功績を称える戦勲図として作成されたが、江南の工房で《原倭寇図巻》の模倣作が作られ広まっていくなかで、胡宗憲という個人を顕彰する戦勲図から、倭寇に対する明軍の勝利、そしてそれに伴う平和な暮らしの再来といったものを描く、より一般的な物語へと、図巻の主題が展開変化をとげている。

た、『平倭図巻』は変化する前の形態を留め、『抗倭図巻』『倭寇図巻』は変化した後の姿である、と解釈するのがもっとも自然なのではないかと考える。先に指摘したような疑問は残りつつ、暫定的に、『原倭寇図巻』および、そこから派生した『平倭図巻』『抗倭図巻』『倭寇図巻』の性格を、以上のように整理しておくことにする。

戦勲図は個人を離れて一般化しうるか

ところで仮に、『原倭寇図巻』が胡宗憲顕彰のために作成されたものだとすると、それが広まっていくという事態はどのように理解されるだろうか。或いはそのような事例はあるのだろうか。胡宗憲を顕彰する戦勲図が、倭寇に対する明軍の勝利という、より一般的な物語として受容されていくことは、例えてみれば『蒙古襲来絵詞』が『元寇図巻』として、竹崎季長という個人を離れて、幕府軍が蒙古軍に勝ったという話にされるようなものであるが、そのような事態は想定できるだろうか。想定できるとしたらどのような状況で行なわれたと考えるだろうか。この点は、本プロジェクト開始当初から意識されてはいたものの、現時点では十分に検討が及んでいない。馬氏は豊臣秀吉の朝鮮侵略により、嘉靖年間の倭寇平定への興味が再びかき立てられた可能性に論及されるが、その妥当性については未検討のままであり、本プロジェクトが残した課題の一つとなってしまう。ただ、個人を顕彰する戦勲図が一般化の道をたどることがありえたことについては、『平倭得勝図巻』が、その可能性を示している。

まだ十分に検討する諸条件が整っていないが、二〇一三年七月に実見した山東博物館に所蔵される「明兵部尚書青州邢瑯伯先生大破日師戦績図一」「二」は、その題が示すように、壬辰倭乱時の兵部尚書邢玠の事績を顕彰するものではなく、図のところどころにみられる文字・造形か

ら『平番得勝図巻』から派生した異本である可能性が高い作品であると考えられる。⁽¹⁷⁾『平番得勝図巻』は、陝西総督石茂華による万曆三年（一五七五）の甘肅洮州の西羌族の平定を描いたもので、馬氏が戦勲図の現存作例として分析の対象にされ、本プロジェクトにおいても、二〇一二年一月に実見し、二〇一三年四月に開催した研究集会で中国側から詳細に紹介された作品である。⁽¹⁸⁾石茂華の戦勲を描いた『平番得勝図巻』から、山東博物館所蔵のこの作品が生まれたのだとすれば、胡宗憲の戦勲を描いた『原倭寇図巻』から、史料編纂所の『倭寇図巻』、中国国家博物館の『抗倭図巻』が生まれたことは、孤立した事例ではないことになろう。

『平番得勝図巻』は、西の番夷征伐、南の倭寇征伐という対比以上に、『倭寇図巻』『抗倭図巻』の性格を考える上で、重要な意味を持つている可能性がある。

以上、『倭寇図巻』の性格をめぐる研究状況は、この三年の間に劇的に変化した。加えてこの三年間に、以上の胡宗憲の戦勲図から派生した倭寇図ではない系統の倭寇図も多数見つかった。すでに詳述したことがあるので、詳細は省き簡単に列挙するに留めるが、まず中国国家博物館所蔵『太平抗倭図』が挙げられる。浙江省台州市の太平の町を襲った倭寇とそれを撃退する町の人々の姿が描かれる。また馬氏が紹介された『三省備辺図記』や明代小説の挿絵に見られる倭寇は、版本という媒体に載せられていたという意味で注目される。かつて田中健夫が類書の倭寇図を集め、「明末刊行の類書類をさらに広く検索するならば類似の倭寇図は多く見出すことはできよう」と述べたことは冒頭に述べた通りだが、類書ではないものの、類書と同じく版本という、広く普及しうる媒体にのって、数多くの倭寇図が作られていたことは、『原倭寇図巻』の普及・展開の問題と併せ、近世中国における倭寇イメージ、あるいは日本人観

を考える上で重要な事実であり、認識を深めていく鍵にもなるものだろう。

〔註〕

- (1) 須田牧子「倭寇図巻再考」・朱敏「明人抗倭図巻の解説」・陳履生「功績の記録と事実の記録」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一二年に日文所収、『中国国家博物館館刊』二〇一一年第二期に中文所収)。
- (2) 二〇一一年七月中国国家博物館にて『太平抗倭図』調査。同年一〇月史料編纂所にて「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」開催。同年一二月史料編纂所にて「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」・「倭寇図巻」と「抗倭図巻」をめぐる新視角―美術史の立場から―開催。二〇一二年一月中国国家博物館にて『平番得勝図巻』調査、浙江省台州市・舟山市・嘉興市にて現地調査。二〇一三年四月史料編纂所にて「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」開催。二〇一三年七月山東博物館にて「明兵部尚書青州邢檉伯先生大破日師戰績図」、中国国家博物館にて『抗倭図巻』を調査。
- (3) 東京大学史料編纂所編『描かれた倭寇―「倭寇図巻」と「抗倭図巻」(吉川弘文館、二〇一四年一〇月)。
- (4) 須田牧子「倭寇図巻再考」(前掲註1)参照。
- (5) 『倭寇図巻』古兵書図録刊行会、一九三〇年。
- (6) 『倭寇図巻』近藤出版社、一九七四年。田中健夫「中世対外関係史」(東京大学出版会、一九七四年)に「倭寇図巻」についてとして再録。
- (7) A「倭寇図巻考」・B「倭寇図追考」・C「相互認識と情報」・D「倭寇図補考」(田中健夫「東アジア通交圏と国際認識」吉川弘文館、一九九七年。初出A一九八八年・B一九九三年・C一九九三年・D一九九四年)。
- (8) 「倭寇図巻考」(前掲註7、213頁)。
- (9) 孫鍵「明代倭患与《抗倭図巻》」(『中国国家博物館館藏文物研究叢書・繪画卷歴史画』上海古籍出版社、二〇〇六年)。
- (10) 朱敏「明人抗倭図巻の解説」(前掲註1)。

- (11) 伊藤幸司「桜圃寺内文庫収蔵資料から―『三綱行実』について」(『Y P U L i b r a r y』第四号、二〇〇七年)。
- (12) 「戦勲と官蹟」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三、二〇一三年に日文所収、『明代研究』(台北)一七、二〇一一年に中文所収)。以下馬氏の見解は本論文による。
- (13) 山崎岳「張鑑「文徵明画平倭図記」の基礎的考証および訳注―中国国史博物館所蔵『抗倭図巻』に見る胡宗憲と徐海?」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三、二〇一三年)。
- (14) 鹿毛敏夫「一五・一六世紀大友氏の対外交渉」(『戦国大名の外交と都市・流通―豊後大友氏と東アジア世界』思文閣出版、二〇〇六年、初出二〇〇三年)。「抗倭図巻」「倭寇図巻」と大内義長・大友義鎮」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二三、二〇一三年に日文所収、『中国国家博物館館刊』二〇一二年第一期に中文所収)。
- (15) 「題石田湖山春曉図賀梅林司馬進秩」『張通參集』(『盛明百家詩』五八(国立公文書館内閣文庫所蔵) 所収)。
- (16) 山崎岳「乍浦・沈莊の役」再考―中国国家博物館所蔵『抗倭図巻』の虚実にせまる」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二四、二〇一四年に日文所収、『中国国家博物館館刊』二〇一三年第六期に中文所収)。
- (17) 同作品は、二点ともに掛幅装、大きさは図本体が縦一三五cm×六六cm程度、題字部分が縦二五cm×六六cm程度である。題字の左脇には「猷唐題記」「山東省／立図書／館藏書／画之印」の朱印が捺されている。題記を書いた王猷唐(一八九六―一九六〇)は、近代の学者である。図は一見して中国国家博物館の『平番得勝図巻』の図柄によく似ており、一幅目には①「山洞」族番族」・②「原任副総兵種繼督戦」、二幅目には③「陝西総兵孫国臣統兵」・④「固原兵備劉伯燮監軍」の標題がある。このうち②③④の標題については、語句に多少の違いはあるものの、「応援原任副総兵種繼」と「原任副総兵種繼督戦」、「陝西総兵孫国臣統兵」と「陝西総兵孫国臣統兵」、「固原兵備劉伯燮督兵」と「固原兵備劉伯燮監軍」、「平番得勝図巻」に同様の標出を見出すことができる。また①「山洞」族番族」は、『平番得勝図巻』には見られない番族名であるが、明軍に襲撃される村の様子は、『平番得勝図巻』に描かれる他の村と共通性が認められる。登場人物たちの官職名からいっても壬辰倭乱図ではありえず、『平番得勝図巻』の系統をひくものと考えるのが自然であろう。『平番得勝図巻』から派生したと考える作品はこれまで知られておらず、新たな発見という意味で重要である。図は『平番得勝図巻』よりも山々の険しさを強調して描き、また、細長い図の上段と下段にそれぞれ異なる場面を入れてある。ただ現存の二幅では物語が完結しないので、おそらくあと何幅があったのではないかと推測される。また物語の展開を考えれば、現在「二」とされる方が最初の場面を描いており、その上段はおそらく冒頭の固原出兵の場面ではないかと推定される。しかし上部左部分に大きな欠失があるため、『平番得勝図巻』に見られる石茂華にあたる人物は切れていて見えない。
- (18) 朱敏「『平番得勝図巻』考略」・陳履生「標題」から『平番得勝図巻』を読む」(『東京大学史料編纂所研究紀要』二四、二〇一四年三月に日文所収、『中国国家博物館館刊』二〇一三年第六期に中文所収)。